

が幅広く読まれていた。当時私が最も関心をもったのは構造主義言語学の基礎を構築したソシュールと現象学的主体論と構造主義的客体論を止揚させようと試みたメルロ＝ポンティだったがフランス思想的記号論の設計者であるロラン・バルトからも文化諸領域の具体的分析方法について各般にわたって学び取らせてもらった。

ソシュール記号論の基本的概念枠組は言語記号の恣意性と示差性を前提としてその形態と意味とを相互補完的、動的にとらえていくところにある。言語活動分析で特に重要なラング（特定言語体）構造内で発生するパロール（発語）のコミュニケーションは構造形態に内包されているコードによって作動するからコードの分析は不可欠である。ソシュールは記号構造モデルを精密に理論化したが高非言語記号領域への適用を行なうまでには到らなかった。ソシュールがやり残した記号意味作用の高非言語諸領域での具体的分析を行なったのがロラン・バルトだった。

バルトは記号論を言語学の一領域、超越言語学として位置づけたことから判るように、言語学を記号学の一領域としたソシュールとは逆の構図を描いていた。そして「記号学原理」（1964）で体系的構成を行ないながら、言語領域と高非言語領域の各分野で応用記号論の著作を相次いで公刊していった。主要な著作だけでもファッション—「モードの体系」（1967）、都市—「記号論と都市論」（1971）、文学—「恋愛のディスクール」

（1977）、写真—「明るい部屋」（1980）など多方面に及んでいる。

私はバルトの分野別の応用記号論のどれにも興味と関心を強く呼び起こされたが、特に強く惹き寄せられたのが日本文化を記号体系としてとらえた「記号の帝国」だった。これは1966年訪日時の見聞に基く分析だが、バルトによれば日本文化は豊富で無秩序なシニフィアンがありながらそれに相応すべきシニフィエの空虚な無意味さによって特徴づけられる。一神教としてのキリスト教に表徴される秩序あるシニフィエの存在を基盤とする西欧文化と対比した場合その差異は明確である。こうしたバルトの日本文化論は他に類例を見ない独自のものだった。

さらにいま一つバルトから強い刺激を受けたのは都市記号論だった。彼の都市論は都市をテキストと見なして住民の生活行動をテキストの生成と読解としてとらえていく。この特異な都市論を私が従前から考察を進めて来ていた現象学的都市空間論—デヴィッド・リンチ、エドワード・レルフなどの論者がいる—と理論的に統合させる可能性を探ること、私はその問題をそれ以後の自己の研究の主要課題として設定するようになっていった。両者の統合をはかりつつそれを客観的トポロジーの位相に接合させる試行も必要だろう。かなり困難な試みとは思いますが意欲的に追求していくつもりである。

## From contemporary English History of Social Thought Toward urban spatial theory — My Passage

### ABSTRACT

Originally I have studied English social thought especially on John Stuart Mill and then on Fabianism — modern English socialism rising in 1880s 1890s.

After considering methodology of social thought, I have interested cultural semiology notably Ferdinand de Saussure and Roland Barthes in 1980s.

I have specially interested and analyzing Roland Barthes semiology particularly urban semiology. Having inspired by Barthes theory, I have tried to synthesize semiological and phenomenological urban space theory since that time to present.

**Key Words:** fin de siècle English Socialism, urban semiology, <champ> on ideas